

ハンマー10話

第7話 アラブの秘宝

佛復建技術コンサルタント 吉川謙造

宝石の鑑定を商売にしている方が居られる。前にも書いたが我が家は歴史も浅く、先祖伝来の宝石類など、家宝と呼べるようなものは何もないから、未だこういう所にお世話になる機会は無。

それでもこんな商売がちゃんと成立つということであるから、世の中にはずい分と価値不明の宝石類があり、又、次々と出てくるものだと感心している。

鑑定に持ち込まれる宝石の大部分は、ダイヤモンドだという。我が国の人気宝石のトップは何といてもダイヤモンドで、金色夜叉のお宮さんがこの石に目がくらんで貫一さんに蹴とばされたのも仕方ないといえるかも知れない。

しかし、友人の鑑定家によると、持ち込まれる“高価”なダイヤモンドは、持主の期待をよそに真っ赤なニセモノであったり、あるいは価値の低いものであったりする方が断然多く、結果を知らせるのが誠に気の毒なケースもあるという。

数カラットのダイヤモンドと思っていたシロモノが実はただのガラス玉だったなどという小説みたいな話は、今では、ほとんどないらしいが、「本モノ」であっても「良いモノ」ではないというケースがあったりして話は少々複雑になってくる。

たとえば「色」が生命である宝石は、鉱物は本モノであっても、色は染めることによっていくらでも変えることができる。

ある高貴な人の集まるパーティに、買ったばかりのルビーのネックレスをして出かけて行ったら、加工してあった色素がしみ出して、首の周囲が真っ赤になったなんて人も居る。

これとて、原石はルビーと呼んで差支えない鋼玉(コランダム Al_2O_3)をちゃんと使用していたというから、少なくとも鉱物学的にはニセモノ

ではなく本モノである。

しかし、買った本人はパーティーで文字通りの赤恥を書いたのだから、ニセモノ以上に頭に来たにちがいない。

ヒスイなんかも、色は染めたものが横行しているというから要注意だ。

又、最近はダイヤモンドだけでなく、ルビー・サファイヤなど人工の物が出まわるようになっているのも常識である。

ダイヤモンドだけは未だ天然石には、かなわないようだが、ルビー、サファイヤなどは人造石の方がかえって立派な結晶が出来るのである。

但し、お値段の方はぐんと落ちる。

鑑定のプロのお話によれば、生活に困って、売る時であれば話しは別だが、それでもなければ“家宝”としているような宝石類は、御先祖様からの“言い伝え”を信じて有難がっているのが無難であり、念のために真の価格を知っておきたいなどとは思わない方が良いでしょう。

やはり夢を持って、心の豊かさで満足していた方が良いでしょう。

ある中近東の発展途上国に御家族と共に、2年ほど駐在されて、あちらの生活を体験された方のお話を紹介しよう。

中近東といえば今も世界の注目を集め、オイルの国、砂漠の国、アラブ人の国などとして知られているが、政状は極めて不安定で、常にどこかで動乱や、戦火の絶えない地域である。

ここに暮らす人達の財産保全の方法は、どこかの国のように株券や土地・マンションではない。こんなものはちょっとした政変や動乱が起きれば、一文の値打ちもなくなってしまう。

又、変動の激しいドルもあてにはならない。

最上のものは何といても、金、銀、宝石等の

貴金属である。しかも常日頃自分の身につけていられるものであれば、これほど安全確実なものはない。これならば、例えばクーデターが起きて、どこかの別の国へ亡命しても、すぐに換金して生活ができるという次第である。

又、これらの国々の男はキリスト教や仏教国とは違って、何人でも妻を持つことが許されている。

しかし、誰でもが持てるというわけではない。それなりの力（男の力とはいわずと知れたSEXと財力である）があるエリートだけの特権である。

ともあれ、男はアラーの神にかけて自分のめとった女性には常に最高の愛情を注がなければならないとされ、その最たる証（あかし）は、妻に対する貢納（プレゼント）である。このプレゼントを常にし続けて妻を満足させられない男は甲斐性なし、として、たちまち失格するのである。プレゼントはもちろん、金（ゴールド）製品を最高とし、腕輪、首飾り、耳飾り、e t c、身につけられる金なら何でも良い。

だから、これらの国々の街角には上は大きな店を構える宝石商から、はては、いかがわしい露天行商の宝石屋までゴマンと立ち並んでいる。

その人も「郷に入っては郷に従え」ということで（もっとも奥さんからも、世間体が悪くてこのままでは暮らしていけないと強いつき上げがあったことも確からしいが）帰国も間近にせまったある日、男の甲斐性を示さんものと、かなり立派な構えの宝石商に立寄った。

もう2年近くもこの地の生活を経験して、ワイロの効用やら何やら、「アラブの商人」のやり方は十分に心得ているつもりなので、易々と彼らの手玉にとられることはないだろう。特に急いで買うこともないので、じっくりと交渉して何か良い掘出し物でもあれば良し、なければないで、ヒヤカシだけで帰っても良いといった余裕たっぷりの買物であった。

店の主人が近寄って来て、色々とオベッカを使っても、裕然とそして毅然とした態度で、つけ入る隙を与えず、見るからにインチキくさい商品には

言い値の1/10でも買わないと告げると、次第に相手の態度が変わってきた。シメシメもう少しで、こちらのペースだと思いはじめた矢先、店の主人が「失礼ですが、あなたは東洋の方と思いますが、どちらの国のお方ですか」と聞いてきた。ここで、決定的な優位を示す時が来たとばかり、「自分は日本で、当地には長期にわたって暮らして来た。この国の政府高官とも知り合いである」と答えた。

この効果は抜群で、相手の目には尊敬とおどろきの色が浮かびみる態度が変わった。

別室に案内され、お茶をふるまわれ、店の主人が言うには「日本のお人に、この地でお会いできたのは誠に奇遇としか言いようがない。実は昨年亡くなった私の父が、もう40年も昔のことであるが、インドで細々とこの商売をしていた時、第二次大戦の最中にふとした事から日本の軍人に命を救われ、大変にお世話になった。私も決してこの話しは忘れない。これもアラーの神のおぼしめしに違いない。」という誠に涙の出るような心暖まる話であった。その後色々とお国の話などが出たが、しばらくして「実は、この店では特別な人しかお見せしないし、絶対に売ってはいけないという家宝の宝石がある。これも何かの御縁かも知れないので、よろしければお目にかけてみましょう」ということになり、主人はさっそく、若い店員をどこかへ使いに走らせた。

やがて、あらわれた人は「立会人」ということで、見るからに人品いやしからぬ、彫りの深い教養あふれた高貴な顔立ちの人で、どこかの王様の親せきに当るということであった。

この人の立会いの下で、厳重にしまい込まれた奥の金庫の鍵をあげ、うやうやしくとり出された箱の中には、紫のピロードに包まれて、ルース（裸石）のままの宝石が置かれてあった。大変に気品に溢れる宝石のようであった。この宝石の由来などを色々と話したあとで、主人はふと感慨深げに「40年前オヤジが死んでいたら、私は生まれて来なかつたらうし、この店もなかつたらうと思うと、不思議の御縁です。思いきって、この宝

石をあなたにおゆずりしてもきっとオヤジもアラアの神もお許し下さるでしょう。」と申し出た。

値段は「今までにつけてこともないから、そんなに高いことを言うつもりはない」といって、立会人といくら位なら良いかなどと相談していたが、色々悩んだあげく、百数十万円ならどうでしょうか、という超破格(?)な値を申し出た。立会人もいささかびっくりといった風情であったが、「この宝石がこの値段で手に入るなどとは思ってもしみなかった。もし貴方買わなければ、是非私があずかせていただきたい。是非お買いなさい。」とすすめてくれた。この金額は予算オーバーしていたので、氏はいささかためらっていると先方は心配してくれて、「日本の方なら信用できるから、お金はあとでも良い。又、少しくらいならおまけしてあげても良い。」と申し出て、結局最初の値段から数十万円まけてもらい、この大切なアラブ

の秘宝を手に入れることができた。

帰りぎわには、さらにいくつかの宝石もサービスしてもらい。結果は最初に言われた値段の1/4位で買った勘定になり、大満足で帰国した。人生は何と素晴らしい出会いがあることから…。

帰国した氏は、しばらくは何事もなく、心豊かに暮していたが、値段もつけられないというアラブの大秘宝が一体どれ位の価値があるのか、知っておいても悪くはないという気持ちにかりたてられ、日本のある信用できる鑑定家の所でこの宝石を持ち込んだ。

宝石を大切に受取った鑑定家はしばらくの間、その石をためつ、すがめつ、ながめていたがやがておごそかに言い放った。「これはただのガラス玉です。我が国ではいいところ数千円といったシロモノでしょう。」

(完)



第8話 キノコの話

山歩きが仕事の私は、山菜、キノコ等山の幸で出合う機会が多い。しかし、悲しいかな、鉱物や蝶には若干の知識を待ち合わせていても、植物については、蝶の幼虫の食べる木や草のほんの一部分を知っている程度で、とりわけ“キノコ”についてはバック詰やビン詰を買って来るか、信用できる人から「これはおいしいキノコですよ」といただいたもの以外、自分で判断して食べられる種類はまったく無い。

こんな私であるが、実は“キノコ”に関しては大変に良い経験をいくつかさせてもらっている。

味、香りそして仲々手に入らないという点から、キノコに番付すれば、松茸とマイ（舞）茸が東西の横綱だろう。

この二種類のキノコについて忘れられない思い出がある。

昭和41年度～42年度にかけて金属鉱物探鉱事業団の広域地質調査の班員となって、九州は宮崎・大分両県にまたがる、祖母・傾山地域の地質調査に従事したことがある。

この時Iさんという大変優秀な猟師を道案内兼人夫として雇い、真夏から秋にかけての4ヶ月間、ほとんど毎日険しい山の中の踏査を行った。

Iさんは当時すでに60才を超えておられたが非常に丈夫でかつ誠意に満ちた方で、道無き道の先行の伐採から、サンプルの運搬までそれこそ献身的に働いてくれた。

さらに非常に博識の人で、土地の伝説・動・植物の習性、山歩きや、野宿の仕方、そして、鉱山の往時の盛業振りなど、折にふれて話して下さった。

マムシ、ヒル、アブ等の多い山地で踏査には大変な苦勞をしたが、この人がついて居てくれたお陰で安心して歩きまわることができたが、一日にマムシ三匹を素手でつかまえて、背中リュック

サックに放り込んで平気で歩いていたのには、いささかおどろかされたものである。そのIさんが9月も下旬のある日、その日の踏査もそろそろ終りに近付いて下山にかかろうとしていた時「ちょっとここで待っていて下さい」と言って何処かへ姿を消した。しばらくしてもどって来ると、「これはお土産です」と風呂敷包みを私に手渡してくれた。中身は何と全部松茸であった。20本以上も入っていただろうか。それから毎日のように「ちょっと待っていて下さい」が続いた。

毎日毎日、私が山のような松茸をかかえて帰るものだから、宿舎にしていた鉱山のクラブのごちそうはもちろん、社宅にも大変な量の松茸が出まわることになった。東京の本社から来たお客様も、毎日松茸ごはん、吸物に、焼いた、煮た或いはフライと松茸攻めになる羽目となった。

ある日の弁当のおかずなど全部松茸だけということもあった。

この間に食べた松茸の量は恐らく普通の人の一生の分量をはるかに超えていたに違いない。当時としてもすでに松茸は大変な貴重品になっており、100g数千円の時代に突入しかけていた頃であるから、まさに、アラブの王様かロックフェラーの食事に匹敵するものであったろう。“キノコの生える場所は自分の子供にも教えない”とは良く言われている事であるが、これほどに好意を与えてくれたIさんも獲物はいくらでもくれるが、生えている所は教えてはくれなかった。

唯一度だけ、採り方を教えてあげましようと言って昼なお薄暗い松林の中へ案内され「このように体を低くして斜面を見上げるようにして見ると、ホラあそこにみつかるでしょう」と言って指さして教えてくれた。しかし私にはいくら「ホラあそこに」と言われても、キョトンとするだけで仲々判らない。確かに松茸の匂いはするのであるが、

とうとうすぐそばまで連れて行かれて、ようやく1本見付けられる始末で、やはり、松茸取りはプロでなくてはダメだとさとした次第であった。

その後自分一人で松茸をとという野望は一度も抱いていない。

マイ茸については、次のような事があった。

実は仙台に来るまで、マイ茸なる物は全然知らなかった。松茸は飽きる程食べてはいたが、俗に言う「匂い松茸、味しめじ」の他にはシイタケ位が知っているキノコのすべてであった。

昭和50年だったか51年だったか、正確な年は覚えていないが、秋田県の玉川ダムの調査に従事していた時のことである。

ダムサイトの左岸の山が通称マイタケ山と呼ばれ、土地の人が時々マイタケ取りに入っているという話を聞いた。同向の地質屋のO氏はキノコにくわしく、それでは、我々も一度マイタケを探してみようということになり、マイタケが生えるブナの水の見分け方から、キノコの特徴等を教わり、とにかく山に分け入った。

歩き出してすぐ私はブナとおぼしき木の根元に人頭大のそれらしいキノコをみつけた。素人にはめったに見付かるでは無いということであったから、半信半疑で、O氏に見せるとこれぞ正しくマイタケだと太鼓判を押された。いとも簡単に見付けられた事に気を良くして、さらに十数分歩きまわると今後は大木の根元から少しはなれた所に、直径1mもあるような大物に出くわした。

あまりにもオバケのようなものなので、「オー

イ持ち切れないような大きなマイタケがあるゾー」と仲間を呼んだが誰も本気にして来てはくれない。

仕方なく両手で抱えて掘り出したが、端の方がボロボロ欠け落ちてても少しも惜しくない。用意した肥料袋にもそのままでは入らないで、いくつかに分割して入れた。

獲物をついで、みんなの所へ引きあげるとみんなびっくり。キノコの大家O氏などは袋はいっぱいになっていたが、みんなナラノキモタシやナメコのような雑キノコばかり、全くの素人で、しかも、マイタケの取り方を教わったばかりの私一人が、わずか数十分で二つ、しかも、そのうちの一つはオバケみたいなものを取ったのだから、プロも真っ青であった。

当時の価格で数万円はするという代物であったろう。その晩は同行の3人と分けたマイタケをキリタンポと一緒に隣近所に配り、我が家でも自慢話に花を咲かせた。

翌日会社で、その話をしても誰一人信用してくれない。仕方ないので、昨日の食べ残しだと、マイタケはカケラ（それでも200~300gはあったろうか）を進呈して、ようやく信じてもらったような次第であった。

このような体験は、恐らく二度とないかも知れないが、とにかく日本は未だ未だ広く、秘境ともいべき所が残されている。何事によらず、率先して現場へ出かけて行けば、何かしら良いことに出くわすかもしれない。

(完)

